

「沖縄的な知」は商品なのか

一人びとの日常的な〈つながり〉の視点から—

村松 彰子

目 次

はじめに

1. 「ユタクライアント」とはだれか
- 2 -(1). クライアントからユタへのアクセス
- 2 -(2). 「ユタ」のクライアント選択
3. 「ユタ」への相談内容・依頼
4. 「沖縄的な知」を求める
5. 結びにかえて——「沖縄的な知」が商品でなくなる時

はじめに

現代の沖縄社会では、今日も「ユタ」¹と呼ばれる宗教的職能者が数多く存在するといわれている。人びとは民間信仰の担い手とされる「ユタ」のもとへ、信仰に関わる問題だけでなく日々の暮らしのなかにおけるさまざまな悩みや悩みを抱えた時に相談するために「ユタ買い」を訪れるが、そこでは信仰に関わる問題だけではなく、近代医学では対処ができないような心身の不良のときにも相談に行くといったように、生活におけるひとつの選択肢として捉えられている。

コマロフ夫妻 [Comaroff and Comaroff 2000] は、その「千年紀資本主

義」論において、世界のいたるところでみられる近年の呪術への信仰は、近代化の進展の遅れによるものではなく、むしろ社会の流動化と不安定化にともなって（あるとき突然、富裕になるとか、自分の知らない外部の世界において自らが失業する運命が決められてしまうといったような）ネオリベリズム下の新資本主義の魔術的性格に対応するためのオカルトや呪術の商品化とその需要の増加として分析している。現代の沖縄社会における「ユタ」の隆盛も、そのような呪術の商品化としての理解も可能かもしれない。

けれども、本論文では、ユタクライアントから「ユタ」へのアクセスのあり方に注目しながら、「ユタ」とクライアントにおける「沖縄的な知」のやりとりが商品ではなくなっていく地点を明らかにすることを目的としている²。そのために、まずは「ユタ」とユタクライアント、そしてその介在者といった人びとの〈つながり〉のあり方を明らかにしておこう。

1. 「ユタクライアント」とはだれか

まず、本論文における「沖縄的な知」ということばの用法を明確にしておこう。本論文では、沖縄という生活世界において、クライアントが「ユタ」に対して求める知識とそれらの知識を求める活動性を含めて「沖縄的な知」と表現している³。「沖縄的」という語は、沖縄の特殊性を示しているわけではない。本論文では、「ユタクライアント」がさまざまな問題への対処法を「ユタ」に求めるとき、その対処法が汎用的な「知識 (knowledge)」としてではなく、人と人との具体的な〈つながり〉において活用されるということを重視するが、その〈つながり〉が沖縄という生活を営む場でつくられているという意味で「沖縄的」と形容している。つまり、そのような具体的な場所および〈つながり〉と切り離すことができない知識を「知」(knowing) という語で呼び、その具体的な場所との密接な関係を示すために「沖縄的」という形容詞をつけている。

W. P. リーブラは、沖縄宗教の一貫性のなさと人びとの災因に対する理解のすべては、結局のところ、超自然的な存在に帰するという特徴を指摘して

いる [リーブラ 1974]。その後、民俗学者の桜井徳太郎が『沖縄のシャマニズム』を著して以降、沖縄における「呪術」研究は、シャーマン側を対象とした議論をその中心としてきた [桜井 1973、大橋 1981、佐々木 1996、池上 1999]。これらの研究は、琉球王朝時代に体系化された祭祀執行者・神女である「ノロ」と「ユタ」との関係や、自然的な存在とアクセスする能力を用いて人びとの個別の問題に対応してきた「ユタ」の社会的意義を問いつつ、「ユタ」それ自体の解明に力点をおいてきた。その一方で、社会組織としての親族研究の領域でも「ユタ」の活動は注目を集めてきた [伊藤 1979、渡邊 1982、小田 1987、1996]。それらの研究では、琉球王朝時代に創られた「門中」制度がやがて一般化していく過程に注目しており、とくに、それを「門中化」が進む過程の「ユタ」による「シジタダシ(筋正し)」の実践との関係において議論がすすめられている。しかし、こういった従来の研究では、宗教的職能者としての「ユタ」の宗教的な意味、あるいは「親族」という領域に対する「ユタ」主導の位牌祭祀への影響など、限定された研究関心から「ユタ」の実践を捉えたものであり、「ユタ」へのアクセスを求める人びとを主題にしているわけではない。人びとが日々暮らすなかにある心配事だけでなく、物事の吉凶を占ったり、病いの治療をしたりと多方面にわたる「ユタ」の実践を総合的に捉えるためには、クライアントに「ユタ」を紹介する介在者をふくめた「ユタクライアント」の側から考察する必要があると考えられる。

人びとがユタクライアントになるとき、つまり「ユタ」に相談に行くというのは、どのような状況にあるときなのだろうか。「ユタ」のもとへ相談に訪れる人びとを、ここでは総じて「ユタクライアント」と呼んでいるが、実際には「ユタ」のもとを訪れる状況はさまざまである。悩みをもつ本人が一人で訪れる場合もあれば、家族に問題を抱えた親や子とその本人を除いて訪れることもある。またその本人も含めて訪れることもあれば、親族たちが付き添いとして同席することもあるし、さらには、一人では行きにくいからと友人と一緒に訪れてそれぞれ別の相談をしていくなど、多様なパターンがみられる。

いずれにしろ、ユタクライアントは中高年の女性たちである場合がほとんどである。それは、「イエ」に関する問題（跡継ぎ問題など）や家族の誰かに問題が起きているときには、その「イエ」の年長の女性が「ユタ」へ相談しに行くものだという慣習があることと関連している。年長でなくとも、主婦であれば、20代や30代の女性も「イエ」の問題を抱えて相談にきていることもある。沖縄には、「女のユタ買いと男のジュリ遊び（遊女遊び）はなおらない」という言い回しがあるが、そこには、一般的に女性たちが「ユタ買い」するものであるという意味合いだけではなく、「主婦（とくに姑のような年配の女性）」がそのような役割を担うべきだという社会的認識が示唆されている。それとは反対に、男性たちは「ユタ」を頼るべきだとされていない。公式的／科学的な知識によっては「ユタ」の力は説明がつかないので、そのような理性に反したものと男性は関わるべきではないといわれるからである。しかしながら、男性たちも仕事をリタイアして高齢になると、「ユタ」と関わる機会が増えてくる。運転手として妻や姉妹たちが「ユタ」のもとを訪れるのを、病院の送り向かえをするのと同じように送迎したり付き添ったりするうちに、「ユタ」の相談に同席するようになることもままある。また、沖縄では、親や兄弟、子どもなどが亡くなった際に、その死者がなにか思い残したことはないかを聞きとってそれを叶えてやるために家族や親しい親族が「ユタ」のもとへ出向いて死者の口寄せをしてもらうという慣習も残されているが、それが「ユタ」との初接触の機会となる場合も多い [大橋1981、村松2007]。

このようにしてみると、人びとがユタクライアントとなるのは、みずからの悩みや問題についての災因を知ったり、対処法を求めたりすることだけが目的なのではなく、生活世界のなかで大切にしている身近なだけかの状況を気遣い、心配してユタクライアントになっていることが明らかとなる。「家族に何かがあったときに、自分のことなら自分が苦しめばいいけれども、家族（とくに、子どもたち）が苦しむのはみていられない。なにかしてやれることがあるのではと思う」といった意見は年配者のクライアントがよく語るものだが、それは、さまざまな困難を抱えた本人だけがその問題の当事者で

はないということを示してもいる。

また、「ユタ」を頼る人びとの意見だけではなく、「ユタ」を嫌う人びとの意見についても触れておきたい。よく耳にする理由には以下のようなものがある。ひとつは、「『ユタ』で財産を失う人を見てみるとそれが人助けとはとても思えないから」という意見、そしてもうひとつは、「『ユタ』はどんな問題であっても結局は先祖供養が足りない（ウガンブスク）だと説明し、供養をしないでいると、これまで以上に子孫に災いがふりかかるといったような悪い予言をするから」という意見が大半を占めている。それらの理由に次いで多いのは、「母親（もしくは祖母）がユタ嫌い、あるいはユタに行かないひとだったから行ってみたいと思わない」といったような、「ユタ」を嫌っているのではなく、そもそもそういった文化のなかで育っていないために関与しない／したことがないのだといった理由もみられる。「ユタクライアント」となることは、「ユタ」の呪術的な力への依存という意味合いを持つために、科学的／合理的な思考とはあいられない。したがって、近代人の構えとしてはふさわしくないというのが大方の（そして表向きの場における）意見である。しかしながら、「ユタ」を拒絶する人びとに個別に、なぜ「ユタ」に関わらないようにするのではなく「ユタ」を嫌って強く拒絶するのかと聞きつづけてみると、子どものころに「ユタ」からひどい言葉をいわれたからだとか、母親が財産を失うほど「ユタ」に通い続けるのを止められなかったからなどと、「ユタ」一般に対する嫌悪ではなく、それぞれ特定の「ユタ」との関係にもとづいた理由がある点は興味深い。それは、「ユタ」にそれぞれの暮らしのなかで関わった経験があればこそその理由だからである。

2-(1). ユタクライアントから「ユタ」へのアクセス

それでは、「ユタ」のもとへ相談に行くときに実際にはどうしたらいいのだろうか。前述のように、先行研究においては「ユタ」の呪術的な側面に関する民俗学や宗教学、社会心理学や文化人類学などの膨大な蓄積がある。そのなかには、ユタクライアントが相談を希望した動機や相談頻度、その相談

の結果行なわれるさまざまな宗教的実践についての記述も見られるが、実際にどのような人と人との〈つながり〉を通して、人びとが「ユタ」へのアクセスしているのかということに関する研究は少ない。

「看板のない仕事」という表現もされる「ユタ」に相談を依頼する場合、まず必要なのは情報収集となる。つまり、現代の沖縄の暮らしのなかでは必要とされながらも公的には職業となりえていない「ユタ」へのアクセスは、その「ユタ」がどこにいるか、その連絡先（具体的には電話番号や住所）を知っている誰かを介して初めて可能となってくる。とりわけ、都市部ではそのような介在者を通して「ユタ」にアクセスするのがふつうである。そこで、誰が「ユタ」とのあいだの介在者となるかということが問題となるが、それは端的にいえば「身近な誰か」である。具体的には、たいていの場合が女性であり、かつ「ユタ」に相談した経験がある場合がほとんどで、（ユタクライアントとなろうとする人の年齢にもよるが）その母親、娘、姉妹、親戚の年配の女性、友人、職場の人たちなどが介在者となることが多い。沖縄の多くの女性たちは、自分よりも年上の親しい親戚の女性や血縁関係になくとも信頼して慕っている目上の女性に対して親しみを込めて「ネエネ」と呼ぶ場合がある。そのような関係にある人たちが、介在者になることが多い。「ユタ」との介在者となるひとは、何らかの困りごとの内容に応じてその人にふさわしい「ユタ」を選び、どの『ユタ』のところへ行って相談したらいいかを連絡先とともに教えてくれる身近な人だということである。

介在者となる人がどのように「その人」に合った「ユタ」を選択するのかについてはいくつかの判断基準が働いているという。たとえば、その「ユタ」の判断はよく「当たる」のか、人あたりはどうなのか、相場から考えて謝金は妥当かといった基準がある。また、「ユタ」の霊的な能力には得意分野があるといわれており、たとえば、死者の口寄せをしたい時などはすべての「ユタ」が口寄せをできるわけではないので、事前にそのひとの状況を判断してその彼／彼女の状況に見合った「ユタ」を選ばなければならない。そのようにしてどの「ユタ」に相談に行くのかが決まったら、「ユタ」のもとへ相談に行こうとする人びとは教えてもらった「ユタ」の家に電話をかけて、

いつ相談を受けてもらえるのか、都合のいい日や時間帯のアポイントメントをとることができるのである。

また、介在者にあたるひとは「だれかを紹介したら最後まで面倒をみなければならぬ」といったことを口にすることが多い。それは、「ユタ」に対してもユタクライアントに対しても意識されていることで、求められている情報を教えてあげたのだからそれで終わりだといったようには考えていない。

たとえば、赤嶺さん（仮名、女性）宅の墓の新築祝いで筆者は参与観察を許されていたが、そこでは次のようなことがあった。赤嶺さんは、リタイアするまで「ユタ」と直接関わる機会はなかったが、墓を移動しなければならなくなり、土地をもとめて新しい墓を造った。そして、彼女は墓を新たに建てた際に行なうべきだとされている儀礼を執行してもらうため、どの「ユタ」にお願いすればいいのかに悩んで、当時近所に住んでいて日頃から交際のあった少し年配の伊波さん（仮名、女性）に相談して、伊波さんが数年来相談をしている「ユタ」の運天さん（仮名、女性）を紹介してもらった。そうして赤嶺さんは伊波さんを通して「ユタ」の運天さんに連絡をすることができて相談をし、無事に儀礼を終えることができた⁴。筆者はその儀礼の参与観察を通して「ユタ」の運天さんと知り合うことができたので、その後、何度も自宅を訪ねてインタビュー調査を行なっているが、そのときに、互いが知り合うきっかけとなった赤嶺さんのことが話題となることがたびたびある。注目したいのは、ここからである。運天さんによれば、伊波さんが「ユタ」の運天さんに対して赤嶺さんを紹介したことを後悔し、謝ってきたのだという。それというのも、赤嶺さんが沖縄の慣習や儀礼などを行なう際に運天さんに相談するのはいいのだが、運天さんが何かを問われて「沖縄ではこういうときは〇〇するのだ」と教えても、彼女は「でも、本土ではそういうことはしない」と答えることがしばしばある。それだけでなく、自分の都合だけで電話をかけてきてその時々のお悩みにどう対応すればいいのかを聞くようなことが多く（電話での相談では運天さんに謝金は支払われない）、それらのことを知る伊波さんは、赤嶺さんの態度は「もの（の道理）をならう人の態度ではない」といって怒り、赤嶺さんを紹介したことを運天さんに会う

たびに謝るのだという。つまり、介在者である伊波さんは、赤嶺さんが「ユタ」である運天さんの「沖縄的な知」をめぐる「ユタクライアント」としてふさわしくない赤嶺さんの態度を「ユタ」の運天さんに謝罪したのである。

このような事例は、状況はさまざまであれ特別なものではなく、本論文における「沖縄的な知」が貨幣の支払いを前提とする商品なのかという問いに大きく関わる問題である。近年は、雑誌やインターネットなどのメディアに登場するような「ユタ」の興隆に対する研究もなされているが〔塩月／佐藤 2003〕、そういった「ユタ」のもとへメディアを介して相談して謝金を支払うことと、身近な介在者を通して紹介してもらった「ユタ」のもとへ相談に行って代金／謝金を支払うことは全く意味合いが異なるのではないだろうか。たしかに、赤嶺さんも伊波さんも「ユタクライアント」であり、「ユタ」運天さんの守護神から得られた「沖縄的な知」に対しては、そのつど「ユタ」運天さんに相場をふまえた一定の謝金を支払っている。一般的に、市場経済においては商品に対する支払いとその商品とは等価であるという前提があるため、それが「商品」ならばそれ以上に負い目を感じる必要はうまれないが、「ユタ」への相談のように身近な人びととの〈つながり〉によるアクセスの場合は、「ユタ」と介在者（あらためていうまでもないが、介在者もその「ユタ」のクライアントである）、そしてユタクライアントのそれぞれがそれぞれの形で負い目とも呼べそうな配慮をしていることに気づかされる。

結論からいえば、身近な誰かを介在者として相談にいくようになる場合には、その関係が持続するのである。さきの事例は介在者が「ユタ」に対して気遣いをしていた事例だが、「ユタ」から「ユタクライアント」に対してなされる配慮には次のようなものが見られる。たとえば、クライアントが何人も待っていて混み合っているとき、その待ち時間にお茶や菓子だけでなく天ぷらや煮物など軽食を「ユタ」の側が振舞うことがあったり、クライアントの子どもや夫などが病気をしたり亡くなった場合にお見舞いや香典を出しもする。また、経済的に行き詰まっていることがわかるクライアントからは謝金を受け取らなかったり、また自分で車の運転ができない人がわざわざ「ユ

タ」の家に来て相談していった場合にはタクシー代を節約できるよう家まで送り届けたりもしている。これ以外にも、還暦や古希といった祝いごとの際には、「ユタ」であってもクライアントであっても祝儀を届けることも、ままある。これは、たんに身近な人が介在者になっているからではなく、「ユタ」とクライアントのやりとりが、互いの冠婚葬祭の情報を知り得ること、そしてそれを気遣えるほどに長年にわたる関係性であることを端的に示しているのである。

2-(2). 「ユタ」のクライアント選択

なんらかの受苦を経て「ユタ」として成巫し、みずからの守護神から力を得られるようになったのちには、「ユタ」が自分の力に助けをもとめて頼ってくる「ユタクライアント」をみずからの都合で拒むと、たちどころに「ユタ」に受苦が再びもたらされるとされている。しかし、実際には、「ユタ」とクライアントが介在者の紹介によって関係をスタートさせている場合であっても、「ユタ」の側が拒否する事例もしばしばみられる。人気があって一定数のクライアントを抱えている「ユタ」の場合は、それ以上クライアントを増やせないという状況にあることもあるが、抱えている問題が複雑で解決が難しそうなクライアントだと感じた時や、介在者などが気に入らない場合などには、「いまはそういうこと（巫業）をしていない」とか「家族の具合が悪くて時間が取れない」とか、たんに「引き受けたくなかった」などといった理由から、電話で問い合わせをした時点で断られることもままある。巫業を「人助け」と語り、一見受け手に見える「ユタ」も生活者のひとりである。主婦であるとか寡婦であるとか、シングルマザーであるとか子育て中であるとか、高齢であるとか、そういった個々の家族構成や生活環境による暮らしのリズムを崩してしまうことのないように、「ユタ」がクライアントたちと接していることを垣間見ることもできる。

そのほかにも、「看板のない仕事」である「ユタ」とは別の看板を持ちながら巫業をすることもある。たとえば、薬屋や整体・鍼灸のような治癒に関

わる仕事や、喫茶店や呉服店など何らかの商いを「ユタ」本人あるいは家族が経営しながら、同じ場所で求めに応じて巫業を営んでいる場合も多い。そのような形態をとっているのは、「ユタ」の仕事が公的なものではないという性格にあるからだけではなく、そのほとんどが女性たちであることから生活のために巫業以外の家事や仕事をしなければならないといった事情も絡んでいる。したがって、巫業だけを専業として生業が成り立つほどのクライアントを抱えている「ユタ」の場合、日々の家事は娘や嫁などの家族がしたり、リタイア後の夫が担当したりすることが多い。他方で、少数の男性の「ユタ」の場合も兼業と専業、どちらの「ユタ」もいるが、巫業を専業としている場合には、女性のそれの場合よりも謝金が高いことが多く、クライアントからの評価が高いこともままあることも付記しておく。

3. 「ユタ」への相談内容・依頼

「ユタ」のもとへクライアントから持ち込まれる相談は、医学的に「病気」と診断されるような心身に関する相談やさまざまな災因の原因究明のための相談をはじめとして、その内容は多岐に渡っている。これについては先行研究のほぼすべてが扱っている問題であるので、本論文では、沖縄本島における筆者の調査に基づいて簡単に整理するにとどめたい。

「ユタ」への相談は、「ハンジ（判事）」や「ハンダン（判断）」といった民俗語彙に相当しており、大きく分けて相談系と実践系の二つの部類がある。まず相談系は、現にある災因の原因を突き止める「ハンジ／ハンダン」のことで、それは以下の三つに分類できる。ひとつは家族の健康問題（肉体的・精神的に健康を害する状態に陥ったとき）や家族間の不和や夫婦問題、金銭面の悩み、人間関係の問題、位牌の継承問題（トートーメー問題）などの相談である。二つめは卜占であり、吉事や法事の日取りの良し悪しについてのほか、旅や仕事の転職など将来の吉凶判断がなされる。年があらたまってからその年の運勢をうらなう「ハチウンチ（初運勢）」もこれに含まれる。三つめは、「フンシー（風水）」で、墓の場所やその向きのほか、家の間取りや

家具の配置などの相談がなされる。

次に実践系についてであるが、これは「オガミ（拝み）」や「オイノリ（お祈り）」といった民俗語彙に相当している。ひとつは、「ユタ」を介して神から示された災因に基づく対処法として「ユタ」とユタクライアントたちがさまざまな「場所」へ祈りに出かけて行き、供養や祈願をするものである。ここには「マブイグミ（落ちて身体から離れてしまった魂をふたたび元通りにする儀礼）」などもふくまれているが、それらは、心身の不調の治療につながるものだと捉えられている。二つめは、「ミーグソー（新しい死者の口寄せ）」や「マブイワカシ（死後、身体から魂を分離させる儀礼）」などの死者儀礼がある。

4. 「沖縄的な知」を求める

ユタクライアントたちは、ユタを「沖縄の癒し係」、「カウンセラーみたいなもの」と語り、悩みを解決するための具体的な方法の一つとして「ユタ」のもとを訪れているが、そこで重視されているのは、たんに実体的な知識の体系としての沖縄に関する知識をえたり、それに基づく体系的な解決法をえたりすることだけではないように思われる。

たしかに「ユタ」の沖縄に関する知識は膨大なものにみえる。その多くは、相談の最中に琉球時代から現代に至るまでの数百年間について、何十代もの先祖の名前を明確に語りながら自らの系譜やその霊性の正統性を主張する語り口に圧倒されないひとは少ないだろう。そこで「ユタ」は、「ユタ」当人と先祖の個別の〈つながり〉を琉球の歴史のなかでクライアントに繰り返し語りつつも、沖縄での暮らしと結びあわされる知識をクライアントの必要に応じてみずからの守護神にうかがいをたて、クライアントに応じて伝える役割を担っている。そこで重要とされているのは、沖縄で暮らすなかで日々の問題に悩んでいるそのユタクライアントと、介在者や「ユタ」を含めたその周囲の人びととのあいだで交わされるやりとりであり、人と人との個別的な〈つながり〉におかれた状況を動かすような「何か」が求められていること

である。以下の事例をみてみよう。

【事例】

沖縄本島・那覇の夫（長男）のところへ大阪から嫁いだユタクライアントの大城さん（仮名、50代女性）は、「本土」出身だということで姑から気に入られず、結婚以来ろくに口も聞いてもらえない状態が長く続いていた。

それでも沖縄での結婚生活を続けて子育てもしてきたが、17年前におきた交通事故によって息子が昏睡状態になってしまうという不幸が起きた。そのとき、大城さんが妹のように可愛がっていた沖縄出身の友人が「こういうときには『ユタ』のところに行って助けてもらった方がいい」と「ユタ」の金城さん（仮名）を紹介してくれたので、わらにもすがる思いで初めてこれまで縁のなかった「ユタ」のもとを訪ねた。「ユタ」の金城さんは、事故のあった場所で息子が落してしまった魂をひろってきたり（マブヤードミ）、先祖供養が足りていない（ウガンブスク）から先祖の供養をするようにと言って、家の仏壇や火の神（ヒヌカン）での供養のやり方を一から教えてくれた。「最初は、『ユタ』の言うことを信じて良いのかわからなかったけれど、息子のことだったから何にでもすがりたかった。結局、息子は意識も戻らずに亡くなってしまったし、お金もいろいろかかったけれど、『ユタ』に教えてもらったやり方で先祖と息子を供養するうちに、長男嫁として次第に姑や親戚からもみとめられるようになった。今でも金城さんには感謝している」。

この事例においては、大城さんの身にふりかかった息子の交通事故という緊急事態をきっかけに「ユタ」との初接触がおきているが、それを介在してくれたのは、息子をめぐむ状況を見かねた沖縄出身の友人だった。「こういうときには『ユタ』のところへ相談に行くべきだ」といわれて大城さんはその助言にしたがい、さまざまな儀礼を行なって息子を助けようとしているが、その努力のいかにもなく彼女の息子は若くして亡くなってしまった。その事実に対するあきらめはなかなかつかないし、数多くの儀礼をするために金銭的な負担も大きかったものの、結果として、周囲が大阪出身の大城さんを

長男嫁として姑や親せきが認めてくれたことで、彼女は納得しているのである。

5. 結びにかえて——「沖縄的な知」が商品でなくなるとき

本論文では、さまざまな問題への対処法としてクライアントが「ユタ」に求める知識を「沖縄的な知」と呼んで考察をすすめてきた。「ユタ」が沖縄での暮らしについて持っている知識は、民間信仰における儀礼の作法や門中化に伴う位牌相続の規範、供養の方法、あるいは禁忌など広範囲に渡るが、一定の形式や規範を見出すことができる場合が多い。たとえば、沖縄では「イエを継ぐのは長男のみ」といった現行の法律とは異なる規範が今日も力を持っており、知らずしらずのうちにであったとしてもその規範からはずれれば、災いの原因になるといわれている。事例の「マブヤードミ」や「ウガンブスク」といった儀礼にもみえるように「沖縄的な知」に他者との共通性や体系性がまったくないわけではない。そして、そのような知識は、「ユタ」のところに本やインターネットでも得られるだろう。

しかし、クライアントが「ユタ」のもとを訪れる場で働いている「沖縄的な知」は、そのような固定された体系的な知識そのものではない。それは、臨機応変の融通性のある実践的知識であり、人びとの個人的な経験を生活のなかでつないでいき、具体的な関係性をもつ身近な人びととの〈つながり〉のなかで活用される。その知は、生活の場における〈つながり〉を作り、維持していくためのものであるようにみえる。最初のところで述べた、「知」(knowing)の活動性とは、そのような〈つながり〉や場への働きかけを含意したものである。

身近な「ユタを知っている誰か」が紹介するということが、家族やほかの問題の当事者や親しい人と一緒にユタを訪れること、また通っているうちに次第に家族を巻き込んでいくことなどにみられるように、クライアントが「ユタ」にアクセスすること自体が、自分を人びととの〈つながり〉のなかに置くことを意味している。そのようなクライアントをめぐる〈つながり〉はま

た、社会的な蔑視を受けている「ユタ」を社会と結びつけ、支えているということもできる。このように、人びとは「沖縄的な知」という枠組みを使いながら、暮らしのなかにある問題を通して互いに〈委ねあう場〉を設けているのだといえるのではないだろうか。そこでは、身近な介在者をふくめて先祖や悩む当人や身近な人たちの心配ごとを解決するために「沖縄的な知」が求められているが、人と人との〈つながり〉という持続的な関係性を保持していくものだからこそ、その「沖縄的な知」に対する支払いはたんなる商品へのそれとはまったくことなる意味あいをもち、商品としての側面をうしなっていくのではないだろうか。

付記

本研究は、2008－2009年度の日本学術振興会特別研究員（DC2）として得られた研究助成金による成果の一部を公表したものである。

記して感謝申し上げます。

註

- 1 「ユタ」とは、沖縄の宗教的職能者の呼称である。基本的にはクライアントが「ユタ」と呼ぶ人を本論文内においても「ユタ」とする。「あの人はユタではない」といわれる場合であっても、依頼に応じて「沖縄的な知」に照らして巫業を営んでいる人も「ユタ」として広く含んでおきたい。
- 2 本論文は、2005年度日本民俗学会年会における口頭発表：「沖縄的な知」は商品なのか—沖縄本島のユタクライアントの視点から—（2005年10月9日発表）を加筆修正したものである。
- 3 この知識（knowledge）と知（knowing）の使い分けは、ドナルド・ショーンが1983年に著した『専門家の知恵—反省的実践家は行為しながら考える』（原題はThe Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action.）の訳者である佐藤学が、その訳者序文のなかで、ショーンがknowledgeを「知識」の意だけでなく、knowingという活動性を含む意味でつかう場合もあり、前者の場合は「知識、後者の場合には「知」という訳語で対応したという使い分けを参照している。
- 4 筆者はその儀礼の参与観察を許されただけでなく、近所の伊波さんとも赤嶺さんを通して知り合うこととなり、一緒に食事をしたり家を訪ねて話を聞いたり、レンタカー会社に勤めている伊波さんの姪に頼んで、車を安く貸してもらったりしている。

参考文献

池上良正

1999 『民間巫者信仰の研究——宗教学の視点から』 未来社。

伊藤幹治

1979 「沖縄本島北部農村の『門中』とその論理——沖縄の民俗宗教ノート3——」『国立民族学博物館研究報告』4-1。

大橋英寿

1979 「沖縄におけるshaman<ユタ>の生態と機能——ハンジ場面観察によるclientの事例研究」『東北大学文学部研究年報』28、246-201、東北大学文学部。

小田 亮

1987 「沖縄の『門中化』と知識の不均衡配分——沖縄本島北部・塩屋の事例考察」『民族学研究』51-4。

1996 「『伝統の創出』としての門中化——沖縄のユタ問題ともうひとつの『想像の共同体』」『日本常民文化紀要』19。

近藤英俊

2002 「カモフラージュとしての専門性——ナイジェリア・カドゥナにおける伝統医療の専門職化をめぐる」『民族学研究』67-3、269-287頁、日本民族学会。

櫻井徳太郎

1973 『沖縄のシャマニズム——民間巫女の生態と機能』 弘文堂。

佐々木宏幹

1996 『聖と呪力の人類学』 講談社学術文庫。

塩月亮子・佐藤社広

2003 「インターネットにみる今日のシャーマニズム——霊性のネットワーク——」『日本橋学館大学紀要』2、pp.79-88

渋谷 研

1991 「沖縄におけるノロとユタ——憑依と相関関係の問題を中心に」『日本民俗学』186、pp.14-38、日本民俗学会。

友寄隆静

1981 『なぜユタを信じるか』 新日本教育図書。

村松彰子

2007 「物語化された死者儀礼——沖縄島の『ミーサーア』をめぐる『ユタ』のクライアントの語りから」、『琉球・沖縄研究』創刊号1巻、早稲田大学琉球・沖縄研究所紀要、pp.89-111。

W. P. リーブラ

1974 『沖縄の宗教と社会構造』 崎原貢・崎原正子（訳）、弘文堂。

渡邊欣雄

1980 『沖縄の宗教人類学』 弘文堂。

Jean Comaroff and John L. Comaroff eds,

2000, Millennial Capitalism and the Culture of Neoliberalism, Public Culture Vol.12 (2).